
ポケモンの短編集。

水上鈴（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンの短編集。

【Nコード】

N6028R

【作者名】

みながみれい
水上 羚

【あらすじ】

ポケモン関係の短編小説を置いていきます。

ただ、残酷な描写などにご注意ください。

一応、説明です。

この短編集の説明です。

この短編集は、作者が突発的に思いつき勢いそのままに仕上げたポケモンの短編を投稿しております。

なので、作者のポケモン連載作品とはまったく関係のない短編や、連載の短編として

連載シリーズに載せるまでもないような小話まで掲載しております。

なお、連載シリーズの小話は「短編タイトル」「連載小説」

のようにどの連載小説の小話なのかを表記します。

連載小説関連の短編は、 1 (連載小説) の 話、 話の間のお話などの説明などは細かく

前書きで指定します。

短編タイトルのみであれば、普通の短編です。

タイトルの後に流血描写注意などの文字があれば残酷な描写などが含まれて降りますのでご注意ください

ください。

ときにはキャラクターの性格が変わっていたりするかもしれません。

ポケモンとくらせば、シャワーズの場合（前書き）

ポケモンが日常にいたららのおはなし。

これは作者の嫁のシャワーズくんと作者をモデルにしたはなしです。

ポケモンとくらはせば〜シャワーズの場合〜

月×日 曜日、のんびり昼ごろまで寝ようとしたら嫁のシャワーズのスイレンに

しっぱでぺちぺち叩かれておこされた。

痛くて腹が立ったので無言でほっぺたをむにーってひっぱったらそのまま無言でけんかになった。

しばらく喧嘩してたらお母さんに怒られたのですぐやめた。

なかなかおりに私も好きなイチゴアメを口に押し込んだら

スイレンの機嫌がよくなったのでよしとする。

月 日 曜日、夕方、のんびりと日記を書いていた私にスイレンがのっかってきた。

ぶっちゃけて言うと重いのでやめてほしい。腹いせに大好物のイチゴアメをあげるときに

いじわるして数分間スイレンで遊んだ。

われながらドSだと感慨にふけているとタツクルと催促がきた。

今日のスイレンはかわいくないので一個でやめた。

イチゴアメのお金も安くないのだと言うとしよぼーんとしていたので不覚にも嫁に萌えた。

「モエルーワ！」と叫びながらなでまわすとドヤ顔で図に乗ってきた。

今日もスイレンはかわいいのかわいくないのかよくわからない。でもかわいいからゆるす。

月 日 曜日、スイレンとお風呂で遊んだ。

オーガニックの石鹸専門店でもポケモンにも人も使える石鹸というものをかってきて使ってみた。

においをかいで私が好きになった石鹸をスイレンも好きになってくれ
れてよかった。

泡だらけになってしばらく遊んでたら一時間も過ぎていた。

よくもまあおぼせなかったものだ。

気が向いたらまたいつか買いに行こう。

今日はこころ辺で。

ポケモンとくらはせば、フラッキーの場合、「煌く星々を探して」の近未来

これはとある知り合いの方をモデルに書かせていただきました。
その方には本当に感謝です。

ポケモンとくらせば、ブラッキーの場合、」煌く星々を探して、

の近未来を

「どちらさまで？」

何もない薄暗い体育館のような建物からひょっこり現れたのは

白いYシャツの上に黒いシンプルなパーカーに紺色のジーンズのことにもいそうな青年が

やや寝ぼけた顔のまま、落ちそうなメガネを左手で直しながら右手でブラッキーを抱えて

建物にやってきて辺りを眺めていた訪問者に話しかけた。

「え？ええ、そうよ。私はシロナ、話は聞いてるでしょ？」

青年にとって思いがけない不意打ちの訪問に戸惑いながらも表情だけは冷静に取り繕い、

気が動転して震える声で答えた。

「ここだと流石にまずいので、何もないところですがどうぞ。お茶くらいはいたしますよ。」

内心あわてながら雪のちらつく厳冬の季節に外ではいけない、と

漏れ出した心の声とつぶやいてしまってから青年はシロナをエスコートして

建物の中へと招き入れた。

ポケモンとくらせば、フリックキーの場合、「煌く星々を探して」の近未来

お世話になっている方をモデルにちょっぴり名前などをいじって執筆。

ポケモンとくらはせば、ブラッキーの場合、」
煌く星々を探して、」

の近未来を

「このサイレイシティのジムリーダーを勤めさせていただいてお
ります、リオと申します。」

何もないところですが・・・」

そつとブラッキーを抱えた青年が自己紹介をしながらも淹れたお茶
をすすめた。

「ありがとう。このリュウシヨウ地方ではジムリーダーが放浪して
るから探すのが大変だったわ。」

どこにでもあなたみたいな例外はいるものね。フフフ・・・

今回は、今までなぜジムのなかったリュウシヨウ地方にジムやリー
グを作ろうとした際に

ジムリーダーになった理由を聞きにきたの」

香りのいい紅茶を手に取り香りを楽しんでから茶化しつつしみじみ
と己の苦勞を語るシロナ。

シロナののんびりとお茶をすすめるその姿をなんだ、そんな理由だっ
たのか。緊張して損した・・・

とつぶやいたりオは肩の力が急に抜けてへなへたと脱力した。

ゆるゆると視線をひざの上で気持ちよさそうに眠る一番の相棒のブラッキーに落として、

くすりと笑って右手でそつと撫でた。

また視線を目の前のシロナに戻してシロナが紅茶を飲み干した頃を見計らって

シロナの問いに対して答えた。

「ボクがこの仕事に就こうと思った理由は・・・」

ポケモンとくらせば、フラッキーの場合、「煌く星々を探して」の近未来

作者がぶっこわれるととんでもないことになります。

いつものことですが、ね。

ポケモンとくらはせば、ブラッキーの場合、」煌く星々を探して、

の近未来を

「ボクがジムリーダーをしようとした理由は、同じものを好きな同志を探していたからです。」

それなりに有名になれば人は集まるでしょう？とにかく、だれかこの思いを分かち合いたかった」

まっすぐに迷いのない瞳でシロナを見ながらはつきりと答えたりオに、そういう理由なのね、

と納得したかのようにうなずき彼の膝の上のブラッキーをみて微笑んだ。

「ふふふ、わかったわ。建前としては及第点のいい答えね。」

でもちよつと無理があったんじゃないかしら？で、本音はどうなのよ」

彼の膝の上のブラッキーが眠りから覚めてまだ寝ぼけている時においでと猫なで声で

声をかけてみるとぴよこんと飛び降りてシロナに甘えた。

「実はですねえ、これ以外に仕事がなくて……ってるうちちゃん！戻ってきて！」

あっさりと離れてしまった寝ていた相棒に驚愕して落ち込むリオを

見て、

面白いものを見たとき喜ぶシロナは違和感を訴えた。

「さっきからあなたの後ろから視線がするのは気のせいかしら？」

「え？視線ですか？・・・あ、もしかして・・・」

リオは思い当たる節があるのかしばらく考え込んだ。

ポケモンとくらはせば、ブラッキーの場合4、「煌く星々を探して」の近未来

ブイズもふもふしたい。

れいは一番作者に近くて遠い、作者の性格と見た目の一部分をとらえてアレンジしたキャラクターです。

ポケモンとくらはせば、ブラッキーの場合4、「煌く星々を探して」

の近未来

炯炯たる瞳でじつとりオとシロナをみつめていたのは、

黒いキヤスケツトと呼ばれる帽子をかぶった黒い上着と黒いロングスカートに身を包んだ

黒いスニーカーの16〜15歳ほどの少女だった。

黒い少女は帽子に無理に癖の強いフワフワでくるくるなショートヘアを押し込んだようで

ところどころぴよこんと髪の毛がはみでていた。

「れいちゃん、ひさしぶり」

少女のほうを向いて、やっととりもどした相棒のるうを抱きしめながらリオは笑って迎えた。

れいと呼ばれた少女の眼光が厳しく冷酷なものから温和なものに変わると

リオに向かって走り出していった。

「りーきゅん！りーきゅん！さみしかったよお、昨日までどこに行ってたの？」

ポケモンのようにリオに捨て身タックルを食らわせたれいはその勢いでるうを剥ぎ取って頬ずりをした。

「やっぱりるうちゃんかわいい。るうちゃんさいこー！あ、そう

だ、みんなできて！

耀ちゃん！アマテラス！天照！スイレン！水蓮！みお！あまこ！颯門！

海夜！」

ハイテンションでニコニコしながら黒い肩掛けカバンからボールを取り出してぶちまけた。

ボールからはブースター、エーフィ、シャワーズ、サンダース、グライエナ、ブラッキーがでてきた。

しばらくの間リオのるうと自分のメンバーと戯れるれい。

疑問だらけのシロナがあまりのれいのハイテンションっぷりにきよ

とんとしている。

すかさずリオが説明を入れる。

「彼女はれいちゃん。このジムのジムトレーナーです。最弱とか言われてますが。」

ハイテンションなのは誰かにかまってほしいのと甘えたいことの裏返しですから

気にしないでください。放って置けばなんとかありますから」

ふと違和感を感じたりオは捨て身タツクルのような突撃の痛みをこらえながら

疑問をれいにぶつけた。

「いたた・・・あれ？れいちゃん、なんかメンバー変わってない？」

「よくぞ聞いてくれましたりきゅん！古参メンバーを入れたい気分だったので

いれかえちゃいました。てへっ」

「てへ、じゃないでしょうが。挑戦者がきたら・・・」

「りきゅんそこは大丈夫、なんとかなる！なんとかする！」

適切にツッコミをリオがいれようにもいれられずに事態の收拾が付かなくなってきた時に

予定外の訪問者がやってきた。

「おや？めずらしいお客様がいらっしやいますね」

「あ、マキさんじゃないですか。ここにくるのはじめてじゃないですか？」

柔らかい笑みを浮かべた深緑の髪と瞳の紳士のような青年が何の前触れもなく現れた。

カツカツと靴音を響かせて人懐っこそうな微笑をキープしたまま、マキと呼ばれた青年は

嗚呼実はですね・・・とくちごもってしまった。

「あ、マッキー。ひさしぶりー。ねえ遊ぼう」

マキは甘えようとして背後からそっと腕を回してだきついたられいをべりっぴきはがしてから

小さい子供をあやすように話しかけながら向き合った。

「しかたありませんねえ・・・リオさんに用が会ったのですが、少し待っていただければご期待に添えるかと」

「いいよ、まってるからね。あ、そういえば冷蔵庫にこの間買ってきたヒウンアイスーダースセットを置いてたんだった。食べよつと」

「あ、そうそう。忘れるところでした。」

リオさん、目を通していただきたい書類を茶封筒に入れましたので事務室の目立つところに置いておきます。今日中に記入を済ませて明日にはリーグのほうに提出をしてください」

「わかりました。奥の事務室のボクの机においてくれればたすかります」

リオが手短かに事務室への道順を教えると、あっさりとマキの出した条件を快諾して

暇つぶしを実行しようとする部屋かられいも用事を済ませようとしたマキもでていってしまった。

「マキさん、四天王なのに暇で挑戦者がここ最近いないからってみんなフリーダムすぎですよ。」

あ、もとからそうでしたね」

ぼそつとシロナに聞こえないくらい小さい声で愚痴をつぶやいた。

「まるで嵐が過ぎ去った後のようね」

驚きを隠せないままシロナはれいとマキの消えていった扉と

自分の持つティーカップの紅茶の水面を交互に見つめた。

「ここはみんなこうですよ。フリーダムで自由人で、

でもそのくせめっぽう強いから腹が立つって言うかなんていうか・・・

しっかりと“自分”というものを持っているのが羨ましい」

ふう・・・とリオが一息ついてのんびりと紅茶を飲もうとしたその時。

「あー！ヒウンアイスがない！」

アイスを探していたれの叫び声にリオは異様に反応して一瞬飛び上がった。
そんな関係のないやり取りで時間は過ぎていった。

ポケモンとくらはせば、フロッキーの場合5、「煌く星々を探して」の近未来

この「ブラッキーと暮らせば」シリーズはコレにて終了でございます。

ポケモンとくらはせば、フラッキーの場合も、「煌く星々を探して」

の近未来ま

「さよーならーっ！またきてくださーい！」

「シロナさん、お元気で！」

海と港に程近いサイレイシティの小高い丘にあるジムの前でシロナと二人で別れを告げた。

シロナの姿が見えなくなるまで手を振り続けて一息ついてから、れいがリオのほうを向いてこういった。

「ねえ、リーキゅん」

「何？れいちゃん」

「だれが冷蔵のボクのゼリー誰が食べたの？ちゃんと油性マジックで名前書いてたのに」

「ああ、それ？ついおいしそうだから食べちゃったよ。おいしか・・」

両者のあははとのんきが笑いが乾いたものに変わると、

嫌な予感を感じとって少しずつれいのほうをリオは見てれいの表裏のない笑顔が黒い感情の

こもったものに変貌を遂げていることに気がつくときポケットの中の

ボールをとりだして投げる。

「エルレイド、テレポート！なるべく遠くの安全な場所に！」

リオのしようとしたことがわかったれいはそくざにボールからブラッキーをだして命令した。

「海夜^{みや}、くろいまなざし」

くろいまなざしでリオが逃げられなくなると、ゆつくりとれいが歩み寄りながら腰にさした

すべてが黒い脇差をゆつくりとぬいて笑った。

「リーきゅん、それ有名店の期間と数量限定のゼリーなんだよ。」

あとヒウンアイスーダースセットもリーきゅんが食べたの？あれ並ぶの大変だったんだよ？」

「ご、ごめん・・・ヒウンアイスは取り寄せできないレアモノだった知らなくて。ね？許して」

「やあだ。ひさしぶりにこの脇差で遊ぼうか。どれくらいリーきゅんで遊んでいられるかな？」

リオとれいが同時にシロナが向かっていった方向とは逆方向に走り出した。

この命がけの鬼ごっこは三日後まで続いたと言っ。

後にリオはこう語る。

食べ物のおらみはおそろしいと。

「ブラッキーと暮らせば」 完

おまけ

「あ、るうちちゃん。名に持ってるの？」

とととととるうが手紙をくわえて事務室からやってきた。
リオが手にした手紙の中身とは、

「えー・・・なになに。『キッチンと書類は置いておきました。

追伸、オートマチック拳銃とその弾倉マガジンを貰っておきます。

最近仕事で使ってしまった上に給料日前なので。

それとあまりわかりやすいところに置かないようにお願いします。

マキことまきこと牧村樹まきむらより』・・・なぜばれたし。

仕事ってあれ趣味じゃないんですか？あの似非紳士執事もどき快樂
殺人者め・・・

あのマガジンとオートマチック拳銃高かったのに。

バイトの初任給で買った好みの拳銃があ・・・」

リオは一人でだれもない部屋で涙を飲んだ。

おしまい ちゃんちゃん

ポケモンとくらはせば、フリックキーの場合5、「煌く星々を探して」の近未来

まさかのギャグで完結。

おどろきです。

アイスクリームシンドローム1 「煌めく星々を探して」近未来if小説(前書)

またこのシリーズです。

アイスクリームシンドローム1 「煌めく星々を探して」近未来if小説

イツシュ地方ヒウンシティ。こはイツシュー1の大会。

この名物のアイスクリームの「ヒウンアイス」を食べにカントーやジョウト、

シンオウやこのイツシュから遠く離れたリュウセイ地方からやってきた一人の男がいた。

彼の名前はリオ。リュウセイ地方のジムリーダーの一人でイーブイとその進化系のポケモンが大好きな通称、ブイズマニアの一人でもある。

長い船旅の途中、強い潮風でメガネがどこかに飛んでいきそうになったり、

ポケモンバトルを挑まれたりしてたくたになつたいい思い出に苦笑しながら波止場に立っていた。邪魔がはいらないように彼自身はこの旅をいわゆる「お忍び」と決めて、念入りに服装から細かいアクセサリーにいたるまで好みとは違ったものにごまかした。

疲れたとつぶやいて木製のベンチに腰を下ろした。

「るうちゃん、ヒウンシティだよ。アイスが買えるといいね」

一息つくくと、一番の相棒のブラッキーのるうが恋しくなつてボールからだしてだきしめた。

原則的に船舶の中ではポケモンはしまっておくようにと言われていて、

普段は寝るときも一緒なくらいなので三日間一人で寂しい思いをした反動だった。

肝心のるうのほうはといえば、だきしめる強さが強いので少しくるしそうにはいるものの主人の愛故だと知っているので反抗はしなかった。

リオはるうを抱いたまま街中を歩いて観光を楽しんでいた。

アイスを売っている店の通りにさしかかるとアイスクリームが
売り切れはしないかと心配していた。

店の前に到着するとあまりの大行列に困ってしまった。

「これどうしよう。あきらかに売り切れるフラグがたってる・・・
しかたない。」

並ばなきゃ買えないし・・・でも、並ぶしかない！
はじめは弱気でオロオロしていたが、決心して並んだ。

「おまたせしました、ヒウンアイスです」

念願のアイスクリームを手にしたリオとるうは満面の笑みを浮かべていた。

近くのベンチに腰を下ろしてアイスクリームとるうを交互に見て悩んだ。

「結局買えたけど、ひとつだけしか買えなかったね。どうしようか？ねえ、るうちちゃん」

しばらくアイスをみつめてうなっていたが、溶け始めたのであわててスプーンですくって

るうにひとくちあげてから自分も一口だけ食べる。それをアイスが半分までなくなるまで続けた。

「りーきゅん、ひとつしか買えなかったの？それじゃ、あげるよ」

「あ、ありがと・・・ってれいちゃん？あれ？ジムにいたころにはジヨウトにいるって聞いたのに」

ここにいるとは思ってはいなかった自分がジムリーダーをしているジムの放浪癖のある

ジムトレーナーのれいがいることに驚いた。

れいは靴から帽子まで真っ黒な服装でヒウンアイスを手手にニコニコしていた。

「なんかひさびさに誰かさんに食べられちゃったアイスの代わりに探してたの」

「ふーん……でもアイスはいいよ。れいちゃんが食べなよ」

前回のアイス事件1（前々話参照）のことを思い出して視線を逸らして

背中にひやりと冷たい汗が滑り落ちていくのを感じたりオはもくもくと食べ続けた。

そんな様子をつまらなさそうにれいは一瞥してアイスを自身の一番の相棒と豪語するシャワーズと

はんぶんこにした。

ふたりとも言葉もなく気まずい空気の中、時間だけが過ぎていった。

アイスクリームシンドローム3 「煌めく星々を探して」近未来if小説

先にれいと相棒のシャワーズが食べ終わると近くの自動販売機に歩いて行って

何かを買ったようだった。リオは最後のひとくちをるうにあげるとゴミ箱にいられて一息ついた。そして、れいの長袖から見えた白い物に気がついた。

「あれ？れいちゃん怪我したの？」

どさつと力なくリオの隣に座り込んだれいは長袖からちらりとみえた白い包帯を、

袖をまくってみせてから乾いた笑いをこぼした。

「あ、これ？ちょっと失敗しただけだから」

「・・・れいちゃんがなにかもう一つ危ない匂いのある仕事をしてるってことを

思い出してものすごく後悔した。反省してる」

「あ、おもいだした！ヒウンアイス事件。うーん、そうだなあ・・・よし！決めた！」

今日一日りーきゅんが私とライモンシティで遊んでくれるならチャ

ラにしてもいいよ」

「へ？そんなのでいいの？」

何かひどいことをされるのではないかと思っていたがあてがはずれてリオは驚いた。

「え？『リュウセイ地方 裏の裏まで見せます法律のブラックゾーン』と真ん中

裏世界の縮図の街の旅』、かもしくは

『リュウセイ地方 有名人の裏の顔やら本名やらブラックな経歴をすべて暴露しちゃいます。いろんな意味で非合法な旅』に案内してほしいの？」

「それはいろいろ危ないことは確定してるからお断りします」

リオが全力で拒んだが、れいがアメリカンジョーク（笑）だと告げると安堵して

れいから手渡されたおいしいみずを飲んだ。

「ふー、おいしい。で、れいちゃんはどこにいきたいの？」

「あのね、まずは観覧車にのって、ライモンドームでスポーツ観戦でしょ、

ミュージカルでしょ・・・とにかく全部！」

れいは指折り数えて、そして笑った。

リオはその数だと全部まわれないからしぼったら？と苦笑した。

「はいはい。お手をどうぞ、今日一日だけのお姫様」

「そこなくっちゃ！」

空を飛べるポケモンでライモンシティに飛んでいった。

おわり

オマケ

「そういえば、れいちゃんってジムトレーナー意外になにしてるの？」

「傭兵とかやってるよ」

「・・・ソ、ソナンデスカー」

「そっだよ」

「うんわかった。もう何も言わないし、何もこれ以上きかないようにするよ」

「この手から零れ落ちる白砂 1 「煌めく星々を探して」 近未来・if小説（前書き

今回はシリアスを目指して。

この手から零れ落ちる白砂 1 「煌めく星々を探して」 近未来・if小説

夕日が地平線に飲み込まれる寸前の時、

黒い服のメガネの似合う青年が事務室のような部屋で

書類の整理整頓やサインなどの仕事をしていた。

仕事をもう殆ど終わらせたのか、

彼自身の近くの書類の束は残り少なくなっていた。

「ふー。これであとこの資料をまとめて、この書類にサインして、

ポケモンリーグリュウセイ支部に提出すれば完了っと。長かったなあ。

それにしても眠いや。ねえ、そう思うでしょ、るうちゃん

・・・って、あれ？寝てるんだ」

壁際の毛布をしいた籠のなかで眠る、

彼が一番の相棒と言ってはばからないブラッキーに話しかけたが

すでに夢のなかにいた。

ま、いいかとおぶやいて椅子に座ったままのびをして、

防犯のための監視モニタールームの部屋を

半ば無理矢理に事務室にしたため、

事務員の背後には監視カメラから送られてくる映像が見えるのだ。

彼にとってありえない非日常的な映像に驚いて眠気も吹き飛んだ。

「うそ！・・・何があつたんだ?!」

あとさき考えずにモニターの画面の映す場所に走った。

奇しくも今夜は満月の前夜だった。

「この手から零れ落ちる白砂2 「煌めく星々を探して」 近未来・if小説（前書き

ひさしぶりの得意分野のシリアス小説で腕がなります。

自分ひとりだけ事務仕事で残っていたことが幸か不幸か、

分からないが事件が起きたと考えた現場に直行した。

「れいちゃん！どうしてこんなに傷だらけの血まみれに……」

血まみれの傷だらけで倒れていたのは、

先程まで書類と格闘していた彼を兄のように慕う、

二人のいるジムのジムトレーナーの少女のれいだった。

彼女はキズの痛みで呻きながら左手に握りしめた

紅白のポケモントレーナーとしては見慣れたボールを彼に言葉と共に託した。

「りー……きゅん。おねがい、助け……」

出血の激しさと全身に及ぶ傷の痛みで意識が途切れてしまった

彼女からボールを受け取った。

よくみると彼女は歩くことすらままならず、

はって来たのだろう何かを引きずったような痕跡が血で形成されて

いた。

「とりあえず、救急車だ！・・・いや、救急車じゃあ遅いんだ。

飛べるポケモンの準備だ」

僅かな瞬間でも無駄にできない、

これは命がかかっているのだと言い聞かせて気丈に振舞う。

何があんでも助けて見せると口にして急に降りだした

どしゃぶりの冷たい冬雨の中で空を飛べるポケモンで

大きな総合病院を目指した。

この手から零れ落ちる白砂³ 「煌めく星々を探して」近未来・if小説

手術室には赤い『治療中』というランプが灯っている。

氷のような冷たい刺すような雨の中を必死に飛んで、

リュウセイ地方で一番大きな病院に辿りついた。

ジムリーダーのリオだとだけ告げると、

病院関係者は訳ありなのだろうと判断したのか詮索はしてこなかった。

半死半生の体^{てい}で託されたモンスターボールのなかみは、

れいの一番の相棒と言ってはばからないシャワーズのスイレンだった。

そのスイレンもパートナーのれいと同じように

無数の深い切り傷や裂傷でボロボロ。

両者が治療中なのをただ待つことしかできなかった。

原因がわからず言いようのない不安にかられて

彼女自身ではないのに思いつめていた。

「マスター、なにか飲みませんか」

やわらかい女の人の声のするほうに顔を向けると、

黒と金色の服の女性が院内の自動販売機を指さしていた。

「るうちゃん・・・あ、今夜は満月か」

とこの昔に失われたポケモンが人の形をとる方法を知り、

会得したるうはたまに人の形をとることがある。

なぜか満月の夜のみ大人の姿で、それ以外は無邪気な子供の姿で。

「あまり根を詰めてはいけませんよ」

なぐさめてくれるるうにリオは心が少しだけ軽くなった。

「うん、知ってる。ボクのせいじゃないことも、だれのせいでもないことも」

心を落ち着けるためと、冷え切った体をあたためるために

なにか飲もうと思って寒さでかじかんで震える指が自動販売機の前を彷徨う。

コーヒーもよかったのだが、いざという時に眠れなくなるとまずいので

なるべくからだを温めてくれそうなホットレモネードに決めた。

普段のねぎらいも兼ねてるうにポケモンも飲めるタイプのホット飲料を渡すと

花のつぼみがほころぶような笑顔を見せてくれた。

かじかんだ両手でリオが半分ほど飲んだ、

まだ熱いホットレモネードの缶をつつむように持つ。

リオがいくらか落ち着いてきて、

顔色もよくなってきたことをうはほっとした。

「ねえ、るうちちゃん。このままここにいっても良くないから帰ろう。」

れいちゃんが落ち着いてからまた来よう」

リオが自分に言い聞かせるようにぽつりと言葉をこぼした。

それにするうは静かに頷いて同意した。

「そうですね。帰りましょう」

そう言いながらも、帰ろうと腰を上げたのは飲み終わってから

もうじき夜明けという時刻だった。

病院の駐車場で鳥ポケモンをモンスターボールからだして、

ごめんね何度も言ってから振り向いて

背後のつかず離れずのるうにこう言った。

「るうちゃん、ありがとう。もう休んでて。あとはなんとかするか」

「わかりました。無理はしないでください」

使い込んだ感じのするモンスターボールを

ウエストポーチからとりだしてるうをもどした。

空が明るみだして夜が開け始めた。

「夜明け・・・か」

少しのあいだだけ夜明けの空をみてから、まだ暗い空へ飛び立った。

「この手から零れ落ちる白砂 4 「煌めく星々を探して」 近未来・if小説（後書き

今回はいがいと短く仕上がりました。

あら不思議。

「この手から零れ落ちる白砂5 「煌めく星々を探して」 近未来if小説

れいが倒れて二週間後にやっと時間のとれたリオは病院に行った。

「れいちゃん、入るよ」

そつと遠慮がちに病室のドアをノックしてるうを腕に抱えて入った。

優しいアイボリーのカーテンが初夏の夕日の光を遮る。

空調の行き届いた白い個室のベッドで、

リオが会いたがっていたれいは眠っていた。

シンプルな黒いパジャマから白い包帯が少しだけ見える。

「あ・・・寝てるんだ」

起こさないように音を立てないように備え付けの椅子をひっぱりだして座った。

「れいちゃんもれいちゃん、

意識不明の重体で二、三日前に集中治療室から個室に移ってきたばかり。

れいちゃんのスイレンもれいちゃんと同じような状態。

もうわけがわかんないや。ねえ、るうちゃん」

膝の上でおとなしくしていたるうをだきしめて、

そのぬくもりに目を細めた。

太陽が沈んで夜になってもまだれいは眠り続ける。

もう一つ椅子をだしてしてそこにるうを座らせる。

何もすることがない上に、待つだけなので眠気が襲ってくる。

それに負けてしまつてリオが起きた頃には完全な夜だった。

時計を見て慌てて席をたつ。椅子を戻してるうをまた抱える。

「るうちゃん。これじゃあ、れいちゃんが眠り姫だね。

だけど、オレはれいちゃんの王子様にはなれないよ。

さ、こんな時間だ。もう帰ろう」

そつと扉を閉めた。

リオとるうの気配が消えてから、

寝たフリをしていたむくつと起き上がったれいはそつとつぶやいた。

「リーきゅんのケチ。私の王子様はリーきゅんなのに」

「この手から零れ落ちる白砂」 「煌めく星々を探して」 近未来・if小説（後書き）

女の子はだれしも白馬の王子や騎士を夢見るものです。

この手から零れ落ちる白砂 6 「煌めく星々を探して」近未来・if小説（前書き

間が開いてごめんなさい。一人称視点だと書きづらい。

誰の視点でもない小説が一番書きやすく、長年そのスタンスを貫いてきたからでしょう。

リ才視点

お見舞いに行った一週間後、

とくに挑戦者もなく埃だらけの資料室で書類整理をしていたら、
れいちゃんはひょっこり何事もなかったかのようにやってきた。

いつものように真っ黒な服で。

だけど、いつも後ろからひよこひよこついてくるのは、

れいちゃんの相棒のシャワーズではなく

赤いバンダナを首にまいたブースターだった。

「れいちゃん！まだ病院にいなきゃダメでしょ。」

ほら、安静にしなきゃ。怪我人なんだもの

……ってあれ？どうしてスイレンじゃないの？」

ぼろっと口からでてしまった疑問をれいちゃんが聞いたとたん、

れいちゃんの表情がかわった。

「うん・・・かなりの重症でまだ意識が戻らないの」

「そっか・・・そうなんだ。ごめんね」

うつすらとほこりをかぶった書類を詰め込んだダンボールに

れいちゃんもボクも向かいあわせに腰掛けてみた。

それからしばらくは世間話をして、

しなきゃ心がなにかに耐えられないと思って。

きちんとまとまった資料をファイルごとにまとめて棚に入れようと

立ち上がってれいちゃんに背を向けたとき、

なぜか後ろかられいちゃんに抱きしめられた。

「えっ？れいちゃん、どうして・・・」

「リーキゅん・・・スイレンがね、たぶんだよ。」

もしかしたら目を覚まさないままになるかもしれない」

この時、ボクは何も言えなかった。

れいちゃんを励ます言葉が、

傷だらけの心にそっと寄り添うための言葉がみつからなかった。

体よりも心が傷ついていたことは明白で。

動けないまま固まっていると押し殺した嗚咽が背中から聞こえた。

「れいちゃん、ここにいるからもっと泣いてもいいよ。全部受け止めるからね」

やっと言葉が見つかった。そうだ、答えはもうあったんだ。

自分の性格を冷静に分析。

ひねくれていて、人嫌い。でもそのくせ他人の温かさを求める。自分の領域に入ってきて欲しくないのに、他人に執着して、他人の領域に入りたがって、干渉したがる。どうしようもないダメ人間です。どうせ求めたって手に入らないのにな。

「この手から零れ落ちる白砂」 「煌めく星々を探して」 近未来・if小説

リオ視点

とくに意味もなく増築した仮眠室に泣きつかれたれいちゃんを

簡素な二段ベッドの下の段に寝かせて、

目が腫れないようにきつく絞ったぬれタオルを目の上にのせた。

今はもうすっかり落ち着いてほっとした。

簡易キッチンのコンロでお湯を沸かす。

仮眠室のカレンダーは春をさしているのにまだまだ寒い。

ボクの体もれいちゃんの体もすっかり冷え切ってしまった。

「ここ（リュウセイ地方）にいと、

故郷のカントーがどれだけ平和かわかったよ。

ここはスグそこに裏がある。

意識して見ないようにしないと見えてしまう、深い深い闇が」

張り詰めていた何かがぷつんと切れてどきっとソファーに力なく寝転がる。

蛍光灯の青白い光がとにかく眩しかった。

「リーキゅん……どうしたの？」

「なんでもないよ。大丈夫だから休みなよ」

「うん。わかった」

白い包帯をまいた痛々しさいっぱいの右手で

ぬれタオルをずらして心配そうにボクをみていた。

ごまかすように苦し紛れに笑顔をつくってれいちゃんの頭をなでた。

泣きそうな表情ばかりだったのにケラケラと笑ってくれた。

よかったと、ほっとして二人で大笑い。

笑いがおさまってから、またふたりでにんまり。

丁度、やかんの湯が沸騰したのでコーヒーをいれる。

ちゃんとソファーに座ってあついコーヒーをふうふうさましながら飲む。

飲んでいると遠慮がちにれいちゃんが話しかけてきた。

「あのね、リーキゅん」

「れいちゃん、どうしたの？」

「海に連れて行ってほしいの」

「海に？」

「そう。いつも嫌なことがあったら海に行くの。」

「見ていると落ち着くし、」

「白い波が全部どこかに流して行ってくれそうなのがするから」

「それで彼女の気が晴れるならと、思って明日海につれていく約束をしました。」

「この手から零れ落ちる白砂」

「煌めく星々を探して」 近未来・if小説（後書き）

次で終わる予定。

「この手から零れ落ちる白砂」

「煌めく星々を探して」 近未来・if小説（前書き）

「ねこひ、おしまひ。」

「この手から零れ落ちる白砂」 「煌めく星々を探して」 近未来if小説

――リオ視点――

翌日、消化し忘れそうだった有給休暇を一日だけとって

ジムから日帰りで行ける距離の海岸に来た。

るぅちゃんは海水の冷たさに驚いてボクに向かってタツクル。

運悪くるぅちゃんの前足がみぞおちにはいつて

白砂にきれなフォームで背面ダイビングするハメに。

なんだか最近ついてないなあ。

痛みから開放された頃にはボクについて歩いていたられいちゃんがいなくて、

ずいぶん先にいて水際で歌っていた。静かでおちつきたい曲。

たまにれいちゃんが一人の時に楽しそうに歌ってるのをみたことがある。

あとで何の歌を歌っていたのか聞こう。うん、そうしよう。

そう思っておもいきり立ち上がってるぅちゃんを抱えて走って追

いつく。

しばらくのんびりと散歩して、大きな流木に腰掛けて夕陽を眺める。

「リーキゅん、ありがとう」

「どづいたしまして。がんばってジムリーダーになったはいいもの、

だれかのために何かやってないなあって思ってさ。結局何もしてないし……」

「そんなことないよ。」

カントーから来て、習慣やら何もかも違うのになうまくやっていくる。

ワタシだったらあっさりリタイヤしてるよ」

れいちゃんは小石を拾っては、

ぽちゃんと海に投げながらポツリポツリと話してくれた。

おもむろに立ち上がって右手を握りしめてボクにこう言った。

「あのね、リーキゅん。実は、ワタシ……リーキゅんのことか……」

れいちゃんが何かを言おうとした時にタイミングが悪く着信音が鳴った。

慌てて自分のポケギアを確認したら、自分のじゃなかった。

カバンにポケギアを戻してもう一回れいちゃんの方を見ると

れいちゃんがポケギアで誰かと話していた。

通話を切ると、

さっきまでの沈んでいた表情から一転、明るい笑顔が戻ってきた。

「りーきゅん、あのね！スイレンの意識が戻ったの！今から病院に行こうよ！」

「うん。行こうか」

あの時、あの言葉の続きを聞く機会なんてなかったけどまあいいよね。

笑顔に勝るものはナシってことで。

「この手から零れ落ちる白砂。」「煌めく星々を探して」「近未来if小説（後書き

これにて、おしまい。たまにはハッピーエンドでも許されるでしょね。

この手から零れ落ちる白砂 オマケ 「煌めく星々を探して」 近未来if小説

この手から零れ落ちる白砂 「煌めく星々を探して」 近未来if小説
説シリーズのオマケになります。どうかあがいてもラブコメなんて書
けなかった作者への読者の要望として前話の派手にへし折ったフラ
グの回収をします。

桜が咲き誇る、春。

カレンダーを勢い良くべりっとめくって、

新しい4月と印刷された面をみてうれしそうにする理由は

リオがカントーのヤマブキシティから相棒たちと身一つでこのリュウセイ地方に

ジムリーダーとして就任して一年と数ヶ月が無事に過ごせたからであつた。

窓から見える庭の種類豊富な桜が目を楽しませてくれる。

「そういえば、一年とちよつとが過ぎてた。

ジムリーダーがボクに務まるのかビクビクしてたけど、やりがいがあつていいね。

けっこうブラックな世界ものぞいちゃったりして・・・でもまあ、生きてるって実感できるからたまにはいつか」

めくった古いカレンダーをまるめて投げ捨てて部屋をでる。のびをして欠伸を噛み殺してなんでもないふりをして、

誰かを探してきよるきよる。

長い廊下をぬけて、いろんな部屋をのぞいて、

挑戦者を迎え入れて試合をする大きなスタジアムに行き着いた。でもみつからないから次は大きな声で呼びながらさらに探す。

「おい！れいちゃん！いないのー！・・・お？クトくんだ。れいちゃんはどこにいるか聞いてみようかな？」

スタジアムの中央でイーブイとその進化系たちが乱闘を繰り広げ、それを見守る少年がいた。

赤いスカーフ、白いブラウスにジーンズの

かわいらしい幼さが抜け切らない少年にリオは話しかけた。

「クトくん！苦労人のクトくん！」

「だれが苦労人ですか！余計なお世話ですよ！……つてあ、リオさんですか。」

おはようございます。カクカクシカジカなんですネ。

ふむふむ……ああ、れいさんですか？早朝から

『お花見したいからリーきゅんに裏手の和菓子屋で羊羹と桜餅かってくるからね』

つて言つていつちやいましたよ。どうしましたか？

「うっん……なんでもないよ。ありがとう」

そうですね、お気をつけてと言われて

ジムを出ようとするとリオが探していた人物とでくわした。

「れいちゃん……たくさん和菓子買ったね。どこで食べるの？」

抱え込んだ大きな紙袋の位置をずらしてひよこつと顔をのぞかせた。中身がばれたことを不思議そうに思つて首をかしげる。

「なんでわかつたの？リーきゅんはマジシャンなの？」

「違うよ。苦労人で器用貧乏のクトくん聞いたんだ。」

あのさ、聞きたいことがあるんだけど……いいかな？

二ヶ月前にボクに言いかけた言葉の続き、聞かせてくれないかな」

すこし照れくさそうに後頭部を左手で書きながら

二ヶ月前の自分に言いかけたれいの言葉の続きをたずねた。

その言葉を聞いた途端顔を赤らめてもじもじして慌てだす。

そしてたどたどしい言葉で言いかけて、言えなかった言葉の続きを言つた。

「えつと……その……あのね、ワタシ、リーきゅんのが好きなの！」

「えっ……そう。こういうときどうすればいいんだろうね。わかんないや」

言えなかつた思いを伝えるために思い切つて告白した彼女と、

とまどつてどうすればいいのかさっぱりで苦笑する彼ののでこぼこな組み合わせ。

しばらく無言の静かな空気が流れた。

「リア充爆発しろ！末永く爆発しろ！」

「そーだ！そーだ！リア充なんか・・・リア充なんか・・・うわーん」

ある者はひよっこりと、ある者はふらりと現れてわらわらと二人と周りに人垣をつくる。

全員、このジムでジムトレーナーをしているトレーナーだった。

そして二人に祝いとも貶しともとれる温かいような生暖かいような言葉をかけた。

おそらく祝福されたのだらうと無理やり納得した。

「ふたりつきりじゃなかったんですね・・・みんな隠れてたんだあ。それにボクもいたし。それにしても、みんな今までどこにいたんだらう？」

苦労人で器用貧乏なクト少年のつぶやきは誰の耳にも入らなかった。

おわり

れいが買ってきたお菓子はみんなで食べました。

「そつだ！エンジユに行こう！」煌く星々を探して近未来if小説

円卓の席に着くのは総勢14名。

窓のない間接照明のみの薄暗い部屋で机の上で資料を広げて会議を進めていた。

リュウセイ地方のジムリーダーや四天王のメンバーたちが席に就いていた。

手元の資料には大きな文字で「慰安旅行の日程・行き先について」と題されたプリントが。

そう、彼らは慰安旅行の日程や行き先を決めるためにここに来ただ。

しかし、進行具合は捗っているとは言いがたく、まさしく「会議は踊る」状態。

扉から一番遠い席、つまり扉の反対側に座るのはフリルにレースをあしらったゴシックな黒のドレスを身にまとう少女らしさを残す女性が目を閉じたまま白い手でサングラスの手入れをする。

その右隣にはくすんだ明るい青色の軍服と臙脂色のマント、大きなルビーの美しい王冠をかぶる青年が美丈夫の顔をゆるませきつてだらけていた。

だらけている青年の隣には退屈している栗色の髪をサイドテールにした少女がペンを左手でくるくると回しもてあそぶ。

黒いドレスの彼女の左隣には新緑の髪と瞳の穏やかな雰囲気を持つ執事風の青年が細くしなやかな手で散らばった資料をまとめる。

執事風の彼の隣には黒衣の少年が微動だにせずに居眠り。

皆一様に無言で、壁掛け時計の時を刻む針の音だけがこだまする会議室。

紫煙をくゆらせて、立ち上っては消えていくそれを眺める者、

カップの中のコーヒーのだす湯気をばーっと見つめる者、

隣り合った者を横目で見る者らの顔には疲れの色が濃く浮き出てい

た。

そのなかでも一人だけつつぷして眠っている清楚な感じのする、どこにでもいそうな青年が何かを寝言でつぶやいた。

「・・・そうだ・・・エンジユにいこ・・・」

その言葉に一番早く反応したのはとても退屈していたサイドテールの彼女。

「ねえ、お姉ちゃん」

身を乗り出して黒いドレスの彼女の方を向いて新しいおもちゃを見つけた子供のような顔で問いかける。

その意図を理解したのか、黒いドレスの彼女は

しかたないと諦め交じりの表情のため息をついてから首肯した。

「いいわよ。旅行の行き先はエンジユシティをメインに・・・そうですね、トキワシティやヒワダタウンあたりが妥当かしらね」

その一言から何もかもは始まった。

これが波乱の元になるとは誰も思わなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6028r/>

ポケモンの短編集。

2011年11月20日19時31分発行